

# 家康の祖父「松平清康」の時代

講師 奥田 敏春 氏

岡崎市文化財保護審議会委員  
岡崎地方史研究会副会長

主な著書  
「三河岡崎城一家康が誕生した東海の名城」  
(共著)

その他  
岡崎市教育委員会社会教育課主催  
「岡崎城清海堀ツアー」講師



本日は、松平清康についてお話をさせていただきますが、清康は「作左」とは直接関係はありません。しかし、作左は、先程もお話がありましたが、徳川家にとって非常に重要な人物です。そういうことで、家康の祖父である清康について知ることは、この「作左の会」にも意義あることとお話させていただきます。

本多作左衛門(重次)についてですが、上佐々木町の上宮寺に自筆の文書(発給文書)が8通残っているのが見つかりました。その文書に、作左は“家康が”と呼び捨てで書いているんです。これが書かれたのは秀吉の時代ですから、家康もかなりの地位にあったはず。それにもかかわらず、このように呼び捨てにするのは、作左はかなり負けん気の強い人だったようです。だから秀吉に嫌われた。

作左は1529年生まれですから、清康が亡くなった時は6歳の頃です。作左は、松平家3代(清康・広忠・家康)に仕えたと言っており、(現代でも)そういうことで紹介されていますが、これはおかしいですね。まだ6歳では、作左としては、家康のおじいさんの時代から仕えたのだと言いたくて、本多家に、こういうことを言い残したのではないのでしょうか。

松平氏の系図をみますと、清康は7代です。広忠が8代、その子が家康です。岩津の松平氏は勢力を広げ、各地に分家を置きましたが、安城松平(安祥城)の初代は親忠です。(岩津松平が減び安城松平が宗家となり)親忠は松平4代となります。親忠の孫が信忠で、その子が清康(松平氏8代のうち7代目で家康の祖父)です。

三河物語(注;大久保彦左衛門によって書かれた、徳川氏と大久保氏の歴史と功績を交えて武士の生き方を子孫に残した家訓書。江戸時代に書かれた)には、清康は、“背は低かったが眼力は鋭く、慈悲深かった”と書かれています。しかし、清康は『謎の人』です。(史実を裏づけする、自らが書いた)発給文書がほとんどなく、後世の書物によって清康像が作られているんです。

信忠は8通くらいの、広忠は10通前後の発給(差し出した)文書があります。こうした史料に基づいて歴史学が研究されますが、それが無い中で清康像を探ってきました。

清康は13歳で家督を継承し、岡崎松平の山中城を攻め取り、安城を出て、そこを拠点とし、その後、明大寺岡崎城に移ったとされています(1524年14歳)。その後、東三河(豊橋)まで攻め込み、三河統一の間際までいった。そのくらい偉い武将だとされています。

明大寺岡崎城のあったのは六所神社の前あたりです。その後、1530年(20歳)に竜頭山に城を築き、これが現在の岡崎城の初めとなっています。

安城松平家の菩提寺であった大樹寺には、23歳の時に制札(注)を下し、25歳の時(1535年)に多宝塔を建立しとされています。

【編集者注;禁令の個条を記し、路傍や寺社の門前・境内などに立てる札。寺社・村落・市場などが軍隊の乱暴から免れるため、武将に請うて下付されたものもある。】

この清康に関しての史実を確認していきますと、山中城の攻め取りについての発給文書はありません。また、清康が東三河に来たという記録は、一点の文書もありません。桜井松平は尾張とつながりがあったようですが、清康が、尾張の品野・岩崎を本当に攻めたのかという気もします。

やはり『謎の人』なのですが、そこで終わってしまうわけにはいけませんので、その中で確認できたこととお話していきます。

まず、山中城についてです。清康は、安城を出て、山中城を拠点にしたと言われています。大久保氏と共に攻め取ったということです。

「史料1」(『松平一門・家臣奉加帳』=寄進(寄付)者の名をしるす帳面)に、清康の名があり、その後に

「医王」という名があります。これは清康の奥方です。山中城があったところは、現在地元の人は岩尾山と言っていますが、昔は、医王山と言いました。そういうことから、山中城には奥さんの医王がいたと考えられ、奥さんがいたので清康もいたのではないかと思います。いたことは事実としても、本拠にしたというのがわからない。伝承が全くないのです。山中城が拠点ということは謎めいています。

山中城は家康の時代に、今の姿に改修されて大きくなっています。いい城ですので、ぜひ見学されるといいと思います。



出典  
「余湖くんのホームページ」

次に、妙源寺で行われた法要についてです。妙源寺は西岡崎駅前にあり、柳堂〔国・重要文化財、聖徳太子の木像を安置した堂（太子堂ともいう）〕がメインで、あとからお寺ができたんです。先程の「資料1」の奉加帳は、この寺で行われた安城松平氏の法要の時のものです。（当時の寺の名前は“明眼寺（みょうげんじ）”と言った）菩提寺でもないのに、なぜ松平の法要がおこなわれたのか、良くわかりませんが。

この法要は1523～26年頃（清康 13～16歳、1524年に山中城を攻め取ったとされている）に行われたものと推定されますが、先程、この奉加帳に、清康と奥方の医王の名があることを確認しました。しかし、清康は、この奉加帳の最後になって出てくるんです。この時、清康はそれほど偉くなかったんです。

安城の信忠（父）や、信定（叔父）の方が偉く、清康はほんの片隅に出てくるんです。つまり、信忠・信定が主流派で、清康は反主流派だったので、山中城に追いやられたのではないかと考えられます。

それでは岡崎城です。山中城を出た清康は、岡崎松平氏を継承し、「明大寺岡崎城」を本拠にしました。このことは、『旅の連歌師・宗長の手記』の記載で確認できます。「史料2」の手記は、1527年（清康17歳）に書かれました。明大寺岡崎城を眺めて、“清康の家城だ”と書いてあります。ここは狭いので、1530年（清康20歳）の頃、竜頭山に新しい「岡崎城（竜頭山岡崎城）」を築きます。そして、城下にはいくつかの寺社を配置しました。

「明大寺岡崎城」は（東岡崎駅の北にある）明大橋の南側の東たもとにある大きな松のところにあります。六所神社の参道から低い尾根が続いて、先端がこの松のところになります。岡崎という地名は、明大寺（城）が丘陵の出崎（尾根から菅生川につき出ているところ）にあったことから名付けられたものとされます。

「岡崎城（竜頭山岡崎城）」は、清康以後、大規模な拡張や改修があり、清康当時のものがどうだったのかはわかりません。

最後に、大樹寺です。清康は、多宝塔〔国・重要文化財〕を建立しました。「史料3」の『多宝塔芯柱銘写』での記述でそれが裏付けられます。

従って、大樹寺の多宝塔は、清康の記念碑と見られます。新田一族の世良田氏を名乗っていることも注目されます。清康は、この年（1535年 25歳）に「守（森）山崩れ」で死亡します。

大樹寺は、安城松平氏の菩提寺で、江戸幕府将軍位牌所です。歴代徳川将軍の等身大位牌を受け取り、この位牌を祭るのが大樹寺の役割でした。

家光は、1641年に三門を作りました。家康が作った分はわかりません。記録がないのです。家康は、父広忠のことを大事に思っており、戒名を「大樹寺殿」としました。

徳川秀忠が整備した松平八代墓所には、八代の関係が見て取れます。四代で、安城（安祥）松平の初代である親忠の墓が一番大きいです。

清康について、間違いのないところを選んでお話をさせていただきましたが、やはり、ところどころ「謎」があります。どうして安城から出てきたのか？ どうして岡崎城を作る力があったのか？ どうして東三河を攻めるといった話ができたのか？ 作られた清康像があるのではないかと。そんな風に私は感じています。

本日はありがとうございました。

講演会記録：竹内 喜則(赤浜五区会員)